

そこで問題になるのは、入ってくる学生の志向性ですが、大学を出てすぐ役立つ専門的実用的知識や就職のために大学にくるのか、それとも、自分の人格形成のための教養を深めようとしてくるのか、ということだと思います。そうした両方のタイプの学生がいることに対して、教官としては実用と教養との緊張関係を考えながら接していかなくては行けないでしょう。

司会 今の田村先生の言われた実用と教養ということに関して、一年生の中で意見はないでしょうか。

学生A 高校の時は、大学に入ることを目的にして勉強してきたんですが、実際に大学に入ってみると、高校とは授業のあり方が違っていたりしてとまどっています。自分としては、専門的な学問研究をやりたいと考えてはいるんですが。

学生B 僕は、実用か教養かという明確な区別をせ



ずに大学に来ただけで、大学に入る前からそんなに自分のやりたい事が見えている人間なんてあまりいないんじゃないかと思います。今は、高校と違う何かがあるんじゃないかなあと、模索している段階だろうと思うんです。

戸田 まず教養と実用をあまりに対立的に考えるのはむなしなことだと思います。大学というのは、本来、多種多様な要素を包含しているわけです。たとえば、外国語の場合だったらすぐに会話ができるように教育するといった考え方もあるだろうし、自然社会分野の一部には、実社会に出てすぐに役立つような学問分野もあるでしょう。しかし、だからと言ってそこにも必ず幅の広いものの考え方や原理的なものについて思考をめぐらせるということがあるはずですし、むしろそれなくしては大学教育は存在しないとさえ考えます。

それから、一年生に言っておきたいのですが、私は高校と大学の間には、やはりある種の断絶があると思うし、またあってしかるべきだと考えます。授

業のやり方も違えば、学生に対する配慮の仕方も違っているわけで、こうしたことを踏まえた上で、つき離れた言い方になるかもしれませんが、皆さんは講義を受け、学生として生活する中で模索してもらわなければならないと思うのです。

積極的問題意識や目的意識を持っているか？

樹下 大学という所の特徴として、いろんな先生方がいて、いろんなことを言っているのだ、ということがあります。学生の受けとめ方としては、そういったいろんな先生の話聞いて、自分なりの平均値をもてばよいのではないのでしょうか。

それから、大学へ行って何か教えてもらうという姿勢ではなくて、もっと積極的に問題意識をもってほしいと思うんです。教官としては、そうした学生の問題意識に沿ってアドバイスなり、指導を行なうつもりでいるんですから。大学は、中学・高校のように“落ちこぼれ”というものが、もともと話題にならない所であって、落ちこぼれるとかこぼれないとかの問題ではなくて、やりたい人間が大学にきて自分で勉強するんであって、それがなければ、大学にくる意味がないのでは…。

武森 今までの話の中で、大学教育の実用と教養ということが、問題になっていましたが、この点について学生の皆さんに聞きたいのですが、果してどのくらい目的意識をもってこの総科に入ってこられたのかということですか。たとえば、工学部・医学部などの場合、エンジニアとか、医者とか、将来がある程度明確になるのにくらべて、総科の場合それほど方向付けが確かではないと思うのですが。

それから、今日の大学教育は大衆化していることにも絡んでくると思いますが、日本の大学は、東大を頂点とした学閥主義的な性格が強く、そこで学ぶ学生は“どこの大学”を出たかというエリート意識が優先するのに対して、イギリスなどでは、学生はどこを出たかではなく、大学を出たことによって、ジェントルマンとしての素養を身につけたことの自信を得るのだということですか。これは皆さんが大学生活を過ごす上で、常に考えなければならないことではないのでしょうか。実用という面では、各人が自分の希望する専門分野を深めていくことはもちろん必要ですが、それと同時に、教養面で紳士としての素養を身に付けていただきたいと考えます。

日南田 大学は何をする所か、また何のために入

たのかということでしょうが、これは問題自体が漠然としていてとらえにくいと思いますが、一年生の段階で考えていることが、一年・二年後、そして卒業の時には、より具体的な形になっていけばよいことだと思っております。ですから、今一年生が大学に入ったばかりでよくわからんとしても、それは当然なのかもしれません。そうした模索を四年に至るまで続けていくことが大学生生活だと言えるんじゃないでしょうか。

それと、学問研究といっても社会科学の場合、自然科学と違って実習とか実験といった身をもって体得する研究(学習)方法ではなく、読書や人との関わりを通じてのものなので、明確に自分のものをつかみにくいということがあるわけです。

そして、高校の時と違って、大学生はヒマがあるという利点を生かしてほしいと思います。その時間をどのように使うかが、大学生生活を充実させるかどうかのカギでしょう。

荒井 私は保健体育の専門ですので、コースに関する専門等については他の先生方におまかせするとして、今の学生諸君一般について感じることを言わせていただきました。

総合科学部の学生をみていると、学部が学際的であるとか、広い視野がなくてはならないといったイメージが先行していて、学生もひとつのことに集中しているといけないというか、自分を自由な位置に置いておかなくてはいけないといった風潮があると思うんです。私は、もっと積極的な意味で、自分の専門を深めながらそれと平行して視野を広めていくということが大切じゃないかな、とよく考えるんです。今は、それが誤解されているような気がします。

なぜ総合科学部を選んだのか？

司会 “大学とは何か”ということ、先生方にかがったのですが、武森先生の言われた、何故総科を選んだのかについて一年生に聞いていきたいと思っております。

学生C 僕の場合、最初法学部を考えていたけれど、大学で勉強するうちに自分のやりたいことがでてくるかもしれないし、幅広い視野をもつことも必要じゃないかと思ったからです。

学生D 高校の時は理系だったので、一応、工学部や理学部も考えてみたのですが、自分の興味がエネルギー問題や核・平和問題にあったことも手伝って、

できるだけ自分の可能性を束縛されない学部を、と決めて決めました。

学生E こう言うと甘いと言われるかもしれないけど、僕は自分の好きなことをしながらでも食っていけるんじゃないかなという自信をもっていて、大学に入って、すぐ自分の進路というか、目的を限定されるような所には行きたくなかったんです。将来はルポ・ライターみたいな仕事を考えているんですが、それはいろんなものに興味をもって、本当にやりたいことで食えるということだと思ひ、そうした僕には、この総科が一番似合った学部だと思います。

学生F 僕の場合、良い所に就職するには大学に行かなくてはと決めて来たんですが、いざ大学にきてみると、授業はおもしろくないし、何をやりたいのかが、もうひとつはっきりしていません。一応、志望のコースは情報行動で、コンピューターの関係を考えているんですが。

学生B さっきも言いましたが、高校の時は大学に行けばきつとなにかおもしろいことがあるだろうと思ってきました。総科を選んだのは、コンピューター関係のことをやってみたいなと考えていたからで、それができれば別の所でも良かったんですが、総科に決めて、改めてみると、ちょっと変わった学部でおもしろそうだなと思いました。

学生G 僕は親にあまり負担をかけたくなかったの、地元の広大を選びました。総科には、自分としては地域文化コースを志望していますが、自然科学系のこともやりたくて、自分の好みで両方できるかと思ってきました。でも、二年になって各コース・群に分れると、結局は他学部の学科・講座と同じようになるような気がします。

学生H 僕は、大学を出たあと家業を継ぐ身で、親



からみれば四年間遊ばせているといった感じじゃないかと思うんです。僕としては、心理学をやりたいのですが、それだけにとどまらず、将来的にも役立つような何かを探し出したいと考えています。それが果して四年間でみつかるかどうか、近頃は少々不安になっています。

学生I 私は心理学もやりたいし、またコンピューターにも興味があって今悩んでいるんですけども、二年になってコースに分れるまでには、やりたいことがみつけれられるかなあ、というところです。

学生J 私も、さっきでた実用と教養ということに悩まされました。特に女子の場合、大学卒は就職が難しいと言われて…。でも、就職のためだけに大学に入るのはいやで、もっと自分のやりたいことのできる所を選びました。大学に入って授業をうけているうちに、心理学もいいけど、生命科学にも興味がわいてきました。

コース・進路の決定について

司会 大学教育は一種のモラトリアム(執行猶予)であって、その四年間で社会に出ていくための準備をする場だみたいな言い方がされていますが、特に総科の場合、専門を選ぶこと、つまりコースを決めるまでに一年間のモラトリアムがあることが特徴だと思いますし、今聞いていると一年生の中にも、まだ模索している人が多いようです。

自然・社会両分野をひっくくめている学部としてそういった模索に対して、どのように対応していくのか、またどう指導していきけるのかについて先生方から御意見をどうぞ。

田村 今、一年生話を聞いて思ったんですが、総合科学部というのが、自然科学も社会科学も含むバラエティに富んだ学部であるのに対応して、学生諸君もいろいろな考えをもってこの学部にきているということです。そして、皆さんに、自分の目的意識に沿ってやりたいことを模索しようという姿勢があれば、一年間のうちにいろんな先生方や授業を通じて、自分の興味がだんだん深まっていくんじゃないでしょうか。

そこで問題になるのは、学生が模索しているのに、教官側はそれをほっとくわけにはいかないということです。理系で入っても文系にも進めるし、自然・社会両分野にまたがって研究することもできるわけですから、そう望んでいる学生に対して適切なアド

バイスをする必要があるになってくると思います。志村 新入生のガイダンスの時、皆さん驚かれたと思いますが、大学は高校と違って授業の取り方で、自由裁量の部分が多いんですね。特に総科の場合、自分で授業のプログラムを作らなくてはいけなわけです。それが、多様な要望をもって入ってくる学生に応えるためのシステムなわけですが、これは二年・三年・四年になってもやはり同じことで、自分の研究計画にそって授業を編成していくことになるんです。

だから何を勉強していこうかという自分の問題意識が重要であって、うまく四年間充実していける人もいれば、安易な授業の取り方になってしまう人もでてくるかもしれません。

そういう意味から、この一年間、何を考えるかと言えば、常に問題意識を育てる方向で授業科目を選択し、勉強していただきたいということです。それでもなおかつ、学習の進め方がわからない場合には、チューターなり、他の先生方に相談していただければ、いろんな先生がおられるので、それなりの方向がみえてくると思いますよ。

戸田 確かに私も現在高校三年間で本当に自分の適性なり能力に合った進路を見極めたいうえで大学なり学部なりを選択することは困難だと思うし、いろんな方面を勉強しながら自分の進む道を決めていくという総合科学部の方針は正しいと思うのですが、ただいろいろ聞いていてひとつ危惧として感じたことは、いろいろやってみた上で自分の専門を決めようとするいわば積極的な人たちが集まるのと、何を言うか、ふらふらして自分の道を決めるのをできるだけ先に述べそうとする無気力な人が集まっているというのでは、まったく違うんじゃないかということです。あらゆる制度というものは、いわば「両刃の剣」で、利用の仕方によってよくも悪くもなる面もっています。制度のいい面を利用し、先生方に悩みをぶつけてほしい。われわれもそういう学生を待っているわけです。

総合科学部的学問へのアプローチ

樹下 一年生の皆さんの意見を聞いて、まあ大体そのような声が出てくるだろうと思ったのですが、ひとつだけ言っておきたいことは、学問研究以外に、大学生活四年間において生まれる友人ということです。自分と同じ専門の人はむしろ、専門の異なる色

んな人とも友人になり得る機会です、それは社会に出たあとでも役立つことも多いし、学生生活にとってもそれはすばらしいことだと思います。

それから話を総合科学部についてということに移しますが、今の先生方というのは皆さん従来の、ある専門領域の学部を出ておられるわけで、当然のことですが、まだ総合科学部出身という人はいらっしゃりません。そこで、総合科学的な学問研究ができるかという、私自身も今からでは、もう年齢的にも無理じゃないかと思えます。ただいろいろのことをやっている人間がいることで、総合科学的な土壌を作っているということが大切なのではないでしょうか。その土壌の中で、皆さんが何かを追求していく時に、総合科学的な研究・教育を行っていくことができるんだらうと思えます。

例えば情報行動科学コースは、三つの群に分れているわけですね。しかし私としては、学生諸君が群に分れているとしても、その群だけにとどまっていたほしくないと思うのです。それはまた教える側の教官にも言えることでしょうが、環境・情報・地域・社会といったコースにとらわれない形で、その土壌を利用して、学際的な研究をやる人がでてくることが望ましいのであり、そうなった時に総合科学的な学問研究が可能になると考えています。

武森 私はいつも考えていることなんですが、総合科学部の自然分野と理学部はどこが違うんだらうかということです。例えば情報科学とか生命科学とか環境科学といった今日の社会が必要としている境界領域の教育・研究組織を整えていることが特徴かも知れません。学生の皆さんが学ぶ上で特徴的なことは、自然分野で言えば物理・化学・生物・地学に分れている従来の学問分野の壁がないことだと思います。この壁によって生ずるデメリットは大きいと思うんです。

これからの学問研究は、ひとつの学問領域だけでは解決しえない問題がでてきていると思うので、もっと新しい視点から問い直すことが必要だし、そのために学際的な研究が重要でしょう。ただ生物学だけをやるというのではなく、そのためには物理や数学などもやっておかないといけないと思うんです。

総合科学部は、そういった新しい考え方、アプローチの方法を身につけた学生を教育する場として機能することが必要です。

私の専門は生命科学ですが、私の学生時代には、もちろんそんな学問はなく、生物学を学ぶと同時



に、物理や化学の分野にも手をつけなくてはならず、廻り道をした経験があります。しかし、総合科学部の場合いろいろな先生方がおられて、さほど廻り道をしないで必要な授業が受けられるようなシステムになっています。だから学生の皆さんには、そういった学部の特徴を十分に利用してもらいたいと思えます。

しかし、ひとつ気をつけてほしいのは、適当に単位をそろえれば逆に楽をして卒業できるということもある点です。そういった安易な方法には流れてほしくないということです。それから好きな分野で、十分な研究をやりうと思えば、当然のことながら、嫌いな分野も必要となってくるはずだし、そういった時には嫌いでも勉強しなくてはいけないんだということを知っておいてもらいたいのです。

日南田 先程言いました猶予があるとか、ヒマがあるということは、逆に言えば、学生が自主性・主体性をもって取組まねばならないということだと思えます。四年経っても何をやったのかわからんということが起りうる学部だけにその点について十分認識して模索すると共に、実際に行動することも忘れずにやってほしいと思えます。

荒井 一年生諸君や先生方の話を聞いて思ったのは総科の学生というのは、えてして結果を急ぎすぎるんじゃないかということです。たとえばある学問領域のエキスパートになるためには、それなりに一つの研究にうちこまなくては行けないが、その過程を軽視して結果だけを見ようとしているような気がするんです。

そういった過程を踏まえたエキスパートと言われる人ならば、異なる学問領域についてもそれなりの対応・認識が可能となると思うのです。そうした準備をモラトリアムといわれる期間にやらなくてはならないんじゃないでしょうか。それからモラトリアムの過ごし方もフィールド的というか活動的な方法で

行なうことが、総科の学生には必要じゃないかと思
います。

コース間に横のつながりがあるのか？

司会 座談会という形式ながら、司会者の不手際も
あって意見の交換・討論というところまでもって
いけなかったような気がします。今までの話を踏ま
えて学生、先生方から意見がありましたらお願いし
ます。

田村 今、先生方からお話しがあったことについて、
学生諸君の方から、今後、総合科学部で自分なりの
摸索をしていく上で、もっと具体的な質問なり、意
見を聞きたいと思うんですが。

学生E それぞれの授業の横のつながりが希薄な感
じで、どう結びつけて受けてよいのか少々とまど
っています。

学生F 大学では先生と学生のつながりあまりな
いような気がします。授業でも先生は教えることだ
け言って帰るだけで学生が常に受身になってしまう
ような授業のすすめ方になっているように思います。

学生B 総合科学部があまりに広い学問領域を含ん
でいて、各コースが他学部の学科みたいに分れて
いるように思います。

学生G 各コースの関わりが、当然あるべきだと考
えますが、あるのかなのかよくわからないんです
が。

武森 具体的にコースの関わりというのは、どうい
うことをさしているんでしょうか。

学生G 四つのコースがあるけれども、あまり関係
が薄いんじゃないかと思うんです。

戸田 教えている側としては、決してそう思わな
いんです。例えば、歴史を勉強している人が、社会文
化の講義を聞いて自分のやる時代の社会構造につ
いて理解を深めたり、また外国語についての専門的な
知識が必要になったりということがありますから、
むしろ考えるべきは、たとえば私の所属するヨー
ロッパ研究で、ある時代について私が文学を講じ、歴
史の人や思想の人にそれぞれの立場から話してもら
うといった、カリキュラムの上での整合性というよ
うなことだと思う。

武森 総合科学部では、四年間のうちで必ず他コ
ースとの関わりがでてくるようにカリキュラムの作り
方がなされています。私は環境コースで授業をや
っていますが、他コースからの聴講者も多いし、また

情報コースの学生が私のところで卒業研究を行な
ったこともあります。

先程強調した総合科学部の特徴は、ここなんだと
思います。だからある意味では、各コースの区別と
いうのは学部の構成上のことであまり気にとめなく
てもいいんじゃないかと思ます。問題があるとす
れば、今日はだめでした、カリキュラム自体
のことじゃないかと考えています。

学生J 個人的なことになりますが、生命科学をや
る場合に物理や数学が必要だということは、今初め
てきいて驚きました。そういったことは学生便覧に
も書いてないので、詳しい説明が欲しいと思ます。

学生K 私もさっきでたコース間の関係について、
よくわかりませんでした。それから、地域文化コ
ースのアジア研究の場合、中国や東南アジアにつ
いては専門の先生がいらっしゃるようですが、中東・西
アジアに関してはおられないようで、授業でもアジ
アと言っても片寄りが出てくると思うんですが。

戸田 それは、学部の教官の枠との問題でやむを
えぬ事情があるわけです。それに教官もできるだけ本
とか資料を紹介したりすることで補おうとするわけ
で、全くそれらの地域をカバーできないというの
ではないと思ます。

地域といっても世界の全地域をとということでは決
してないので、もしたとえはどうしても北欧につ
いて勉強したいという人がいれば、その人は北欧の専
門家のいる大学に入るべきだったと思ます。

コースの受け入れ定員の枠は全廃できないか？

学生L これは、無理な注文かとは思いますが、現
在ある各コースの定員（受け入れ可能数）を全廃し
てはどうかということについて先生方はどのような
お考えでしょうか。というのは、一年の時どうして
もとれなかった単位のために自分の望むコースに入
れないという可能性もあると思うんですが。

武森 コースに定員の枠が設けてあることはしかた

